



TITLE:

「認識論」という語の起源について

AUTHOR(S):

ファイヒンガー, ハンス; 渡邊, 浩一

---

CITATION:

ファイヒンガー, ハンス ...[et al]. 「認識論」という語の起源について.  
人間存在論 2013, 19: 55-68

ISSUE DATE:

2013-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198984>

RIGHT:

# 「認識論」という語の起源について

ハンス・ファイヒンガー

渡邊浩一 訳・解題

ライプツイヒの『哲学協会』の問題告知板にしばらく前、「いつ、どこで、誰によって『認識論 Erkenntnistheorie』という語は最初に用いられたのか？」との問いが見られた。それによって議論が盛り上がり、この件についてさまざまな見解が表明されたが、その間で主張が揺れていた両境界は前世紀（「一八世紀」）の中葉と今世紀（「一九世紀」）の六〇年代末とで、それゆえ百年以上の違いとなっている。私自身は、この表現は今世紀の六〇年代初頭ないし中葉に出てきたという見解に与していた。この論争はあまねく哲学の諸サークルの関心を惹くものだったので、これを機に私は語をできるだけ詳しく

跡づける気になり、まさに現今、認識論的諸問題が討議の対象となつてゐるからにはこの論点は世間一般のためになるという期待と、この問いに関わつてゐる多くの人々はきつと認識論という語の歴史的起源をご存じでないという——おそろく必ずしも不当ではない——予期とをもつて、ここに自らの

探索の結果をお知らせするものである。次第しだいに遡つて私はついに一八三二年にまで至つてゐるが、これ以上遡つてこの語を見いだすことは私にはできなかった。

すべての形而上学的・倫理学的論究に認識論的研究が先行しなければならないということを経験的に意識に上らせたのは、周知のようにロックである。というのも、デカルトやスピノザ等が認識論について提示した事柄はむしろ折に触れての発言でしかなかったし、ライプニッツはロックによつて初めて自身の『知性新論』へのきっかけを得たのだったから。ロックはその著作冒頭に印刷された「読者への手紙」において、自身の諸研究が生じてきた経緯、その著作が偶然から始まり依頼されて書き継がれたという事実、そして（幾人かの友人と一緒に哲学的諸問題を解きあかしてみようとしたところ、さまざまな困難や疑問がわきあがつてきて）「私たちはおそろく誤つた道に踏み入つてしまつており、そうした

研究に先立ってひとは自らの能力を検査し、いかなる事物が知性にとって取り扱いに適しているかを見てみなくてはならない」と思うようになった経緯について語っている。これがおそらく学・Wissenschaftとしての認識論の誕生であったのだが、この学が形而上学から解き放たれるまで、そしてドイツの地で独自の名前を与えられるまで、それまでには多くの年月が移りゆかねばならなかった。ロックはその諸研究を一六九〇年に『人間知性についての試論（＝人間知性論）』(1)と名づけ(シェーラー(2)はこれを「一八六〇年に『知性論 Verstandeslehre』と呼んでいる)、それはライプニッツの『人間知性についての新たな試論（＝人間知性新論）』(3)の表題にも引き継がれている。さらにバークリの認識論的著作も『人間の知識の原理に関する論文（＝人知原理論）』(4)（一七一〇年）という表題を与えられている。これ以降ドイツでも認識論の研究が盛んになったが、それは例えばアンドレ・アス・リュ・ディガールの『すべての観念が感覚を起源とするということについての討論』(5)（一七〇四年）、クルー・ジウスの『人間の認識の確実性と信頼性』(6)（一七四七年）という書物（『認識 Erkenntnis』の語はグリームによればルターが初出である）、G. F. マイアーの『理性論（＝論理学）』(7)——これについては『理性論』網要(8)（一七五二年）も出版されており、それをもとにカントは論理学の講義を行ったのだが、そこにも認識論的研究が含まれており、カントの手稿本に見られる認識論的傍註は最近 D. r. B. エルトマンが『プロイセン年報』に公表した——といった具合である。ライマール

ルスもそうした『理性論』(9)を一七五六年に著し、その第五版が一七九〇年にも出版されている。同様に特筆されるのはエ・バーハルトの『思考と感覚の一般理論』(10)（一七七六年）である。『理論 Theorie』という語はイギリスからドイツに伝来したが、この語はおそらくそのイギリスで最初に用いられた。少なくともバークリの一七〇九年の『視覚の理論（＝視覚新論）』(11)やブリーストリの一七七五年の『人間の心の理論』(12)以前にはその用例は見られないようである。

カントの基礎的著作以来、認識論に関して『理性批判 Vernunftkritik』という語が広まったが、われわれは、当時はこの語が『認識論』の語の位置を占めていたということができる。その時期のラインホルト、マイモン、ベック等の書物にこの語は頻繁に見られ、おおよそわれわれのいうところの認識論の範囲をカバーする形で用いられている。かくして例えばティ・デ・マンは一七九四年に『テ・アイ・テ・ス』、または人間の知について——理性批判への寄与』(13)を著した。カントも理性批判をこの意味で一個の新たな学と見なしたのであり、このことの自覚を『純粹理性批判』第一版序文で不足なく明確に表明している。

カント以後の最初の体系的な認識論は（K・L・）ラインホルトによる一七八九年の『表象能力の新理論の試み』(14)である。しかしただ、その第一部は表象能力の理論を取り扱い、第二部は認識能力の理論と呼ばれ、それで内実に即してこれに認識論という名称もまた与えられたのだった。しかるに、この語はラインホルトには一切見られない。どの箇所でも彼

が用いるのは右のような間のびした語の組み合わせであり、「認識論的」という形容詞を他の言葉でいうために幾つもの文を要している。この著作はカントの『純粹理性批判』に対して、マクローリンの『流率の理論』<sup>(15)</sup>（——正しくは『流率論』）がニュートンの『自然哲学の数学的諸原理』<sup>(16)</sup>に対するのと同様の関係にある。それは、本来の意味では認識論的といえない部分をすべて除去して素材を体系的に仕上げた最初のものであった。ラインホルト自身は「根元哲学 Elementarphilosophie」という表現でわれわれが今日認識論と呼んでいるのと本質的に同じことを言い表そうとしている。表象能力および認識能力の理論には欲求能力の理論が続くはずであった。当時の書物の中には今日われわれが認識論と呼び慣わしているものに対してさまざまな名称が見られるが、例えばフイヒテの『知識学 Wissenschaftslehre（＝全知識学の基礎）』<sup>(17)</sup>（一七九四年）、ブーターヴェークの『論証学 Apodiktik』<sup>(18)</sup>（一七九九年）、フリースの『理性の新批判 Neue Kritik der Vernunft』<sup>(19)</sup>（一八〇七年）、マイモンの『新たな論理学の試み』または思考の理論 Versuch einer neuen Logik oder Theorie des Denkens』<sup>(20)</sup>（一七九四年）、アビビトによる『認識の哲学 Philosophie der Erkenntnis』<sup>(21)</sup>（一七九一年）、シヨールペンハウアーの一八一八年出版の著作『意志と表象としての世界』<sup>(22)</sup>における「悟性論的・dianoioisch 研究」がその証拠である。「超越論哲学 Transcendentalphilosophie」という表現もこれに数えられるが、ただしこれは厳密にカント的な意味では単に認識論ということを含んでいる。独

自の名称がなかった時点では、認識論的研究は形而上学に数え入れられた。ひとが「認識説 Erkenntnislehre」というごく手近な表現に思い至ったのはかなり後のことである。私はこれをまず、一八〇八年に『認識説または形而上学』<sup>(23)</sup>を出版したW・T・クルークのもとに見いだす。ただしクルークは「認識説」を常に形而上学と同一のものとして用い、「手引き」<sup>(24)</sup>や『体系』<sup>(25)</sup>でもそうしているし、彼の『辞典』<sup>(26)</sup>でも認識説と形而上学とは完全に同一のもので用いられている。——どればどクルークがこの点でカントと相違しているのかここで検討することはしない。この後「認識説」の語を見かけるのは珍しいことではなくなる。例えば一八二〇年に『純粹理性の意識にしたがう認識説』<sup>(27)</sup>を著したベネケのもとに、一八二四年に『学の一般的草案』<sup>(28)</sup>（——正しくは『学のための……』）の第三部人間学的部門で「認識説」を取り扱っているJ・E・v・ベルガーのもとに、一八二三年（——正しくは一八二二年）に『認識説と思考説の体系の草案』<sup>(29)</sup>を出版した息子の方の「エルンスト・ラインホルトのもと」といった具合である。これ以降は認識論的著作はごく稀にしか見られなくなる。一八二三年から一八五八年にかけてこの語は、少なくとも表題にはもはや現れず、ようやく一八五八年にゼングラが『認識説』<sup>(30)</sup>を書き、一八六三年にシュミット・フォン・シュヴァルツェンベルクが『認識説の草稿』<sup>(31)</sup>を、一八六八年にエールマンが『自然科学としての認識説』<sup>(32)</sup>を書き、一八六九年にシュトゥットが『唯物論的認識説』<sup>(33)</sup>を書いて、それにモントゴメリーが『経験の見地からの

カントの認識説<sup>34)</sup>で論駁している。しかしながらこの年以來この表現——これはグ・リムの『大辞典』(『ドイツ語辞典』第三卷(一八六二年)八七一頁)には見当たらない——はさらに稀になり、その位置にいよいよ「認識論 Erkenntnisstheorie」という語が登場する。いまやわれわれはこれを探索しなければならない。

自然に思いついたのは、「E・」ラインホルトの『認識能力の理論』によって「認識論」という表現が形成されたということである。とはいえ、それはかなり後の出来事であった。晩年の(K・L・)ラインホルト(一八二三年(没))の諸著作にはこの語は見られない。「哲学的諸学における一般的用語法のための同義語論の基礎づけ」<sup>35)</sup>という一八二二年出版の彼の後期著作の一冊には、この語を探しても見つからない。一八二五年に出た同人の伝記「K・L・ラインホルトの学説と文芸作品」<sup>36)</sup>(——正しくは『……生涯と文芸活動』)は子息のエルンスト・ラインホルトの手になるものであるが、先に述べた一八二三年出版の彼の『認識説』(「29」)と同様、ここにもかの「認識論という」表現は現れていない。

そこで注目されるのは、一八三二年から三四年にかけて出版されたその息子の方のラインホルトの著作「人間の認識能力の理論と形而上学」<sup>37)</sup>で「認識論 Erkenntnistheorie」「認識論的 erkenntnistheoretisch」「認識論者 Erkenntnistheoretiker」という表現が既にまったく周知のものとされていることであるが、それでいてラインホルトはこれらの表現を自分が最初に造ったとはどこでもいっていない。にもかかわらず私は――

——これらの表現をさらに遡って発見できないからには――まずこの著作の執筆とともに「認識論」という表現が登場したものとは想定しないわけにはいかない。その著作の第一卷(全五二二頁)は完く欠けるところのない認識論を提供しておりしかも緒論として、今日なお通用する実に読み応えがあつて見通しのよい認識論の発展史を提示している。その第一部は「人間の意識の発展」を扱い、第二部は「人間の認識能力の批判」となっている。第二卷では、「認識論と」厳格に区別された仕方では「形而上学」——詳しくはまず「形而上学的弁証論」——それから「形而上学的理念説」——が提示される。その第一章は「形而上学の認識論的基礎」といい、ここでは第一卷の結論がまとめられている。ラインホルトはきわめて厳しく論理的な説明、心理学的・認識論的説明および形而上学的説明を、明晰にしかもわれわれの時代に書かれてもしたかのような表現をもつて区別している。この発見は私にとって、この著作が忘れ去られているだけになおさら驚くべきものであった。かくも精密なあのユ・バーヴェ・エ・ク・ス・ラ・これを挙げておらず、わずかにエルトマンがそつてなく言及しているばかりである。しかし、とにかく形而上学と認識論とを分離するのであれば(そしてこのことはいまや一般的になろうとしているように思われるが)、エルンスト・ラインホルトが自覚的にこれを行い、そして自身の用語法によって少なからずそうした決定的な分離に貢献した最初の人であることは忘れられてよいはずがない。ここにきてようやく目ざめたかに見える認識論の問題と形而上学の問題の相關関係についての明

断な意識が、ラインホルトにはこのうえなく望ましい強さでもって見いだされる。彼は幾度となく(特に第二巻五二頁で)「自分が主張しているのは、哲学的諸学の体系連関において、認識能力の理論つまり認識論が形而上学に先行しなければならぬということである」と口にしている。なるほど認識論の発展にとってこの著作はほとんど、あるいはまったく意義をもつことはなかったが——まさしくまったく顧みられなかったのだから——、しかし認識論の歴史を書く者はこの著作を考慮に入れないわけにはいかない。なぜなら、そこに初めて「認識論」の語が登場するからというだけでなく、この著作が実質的に、今日なお注目に値する認識論とそれに基づく形而上学との試みを含んでもいるからである。これについてなお言い添えておくと、新たな名称を造り出させ、またとくに「認識説」という語を拒否させる主な動因は、手ごろな形容詞が求められたところ、これを「認識説 Erkenntnislehre」からは造り出せず、「認識説者 Erkenntnislehrer」という表現もやはりふさわしいものではなかったのに対して、「認識論的」や「認識論者」は実にふさわしい名称であるというような事情であつたかと私には思われる。

既述のように、この著作はほとんど世の共感を得ることはなく、「認識論」という新たな表現も採用されるべくはなかった。なるほどアーベルトが一八四〇年に『エルンスト・ラインホルトとカントの哲学・I 認識論の批判(附その著者への献辞)』<sup>38)</sup>という試論(「認識論」の語が表題に現れるのはこれが最初である)を著しているが、この試論中でアーベル

トが新たな表現を用いる仕方はまったく不十分である。その時期の他の著作中にはこの語は、私の目の届く範囲では、ごく稀にしか見られない。ローゼンクランツの『カント哲学の歴史』<sup>39)</sup>——彼とシュールトの編纂したカント著作集の第一二巻——ではこの似つかわしく手ごろな表現は稀にしか使用されず、その代わりにありとあらゆる似つかわしくからぬパラフレーズが用いられている。「認識説」もやはりごく稀で、「認識論」はただ一例だけ(三九六頁に)認められ、「認識論的」「認識論者」は見いだされなかった。

ここから先、私は語の痕跡をすっかり見失ってしまった。表題には見られず、当時の書物の中で行き当ることもなかった。しかるに、不意にこの語は一八六二年、E・ツェラーによる名高い講義「認識・論の課題と意義について」<sup>40)</sup>——正しくは「意義と課題……」——これをもってツェラーは「論理学および認識・論」についての自身の講義の幕開けとした——で再浮上した。これによって件の名称は成句として人口に膾炙することとなった。しかしながら、このことについてはなお幾つかの困難がある。ツェラーは「認識・論 Erkenntnis-Theorie」と書き、「認識論 Erkenntnistheorie」とは書いておらず、ただ講演そのものの中でときおり後者の書き方をしていただけで、これは彼にとってこの「認識」と「理論」の合成語が目新しいものと感じられていたことを示唆しているように思われる。——実際、それに加えて、講義中に「認識論的」という形容詞が認められないということもある。ところでこの語の公式の導入と同時に——私はいつてお

きたいのだが——同じ著者の『ギリシア哲学史』<sup>(4)</sup>にはある注目すべき変化が生じていた。一八五九年に出版された『ギリシア哲学史』第二版の第二巻にはこの語はまだ見られず、ここではツェラーは「認識説」という表現で通しており、これは一八四四年出版の第一版でも同様であった（例えば第一巻二二、二三頁。二二頁で彼はたしかに「認識作用の理論 *Theorie des Erkennens*」とはいっているが、「認識論」とはいつていない）。これに対して一八六三年出版の第三巻では「認識論」の語がいたところで用いられているが、他方で「認識論的」という語は私には依然発見しえなかった。それゆえに、ツェラーが当時この語を目新しいものと見なしていたように思われるのである。とはいっても、ツェラーもこの語の造り手ではなく、これは既に一八五五年出版のプラントルの『論理学史』<sup>(4)</sup>第一巻に見られ、その四頁、四九七頁で彼は「認識・論 *Erkenntnis-Theorie*」を「論理学」とはつきり区別している。第一巻四五一頁ではプラントルは「認識論 *Erkenntnistheorie*」と書いている。目を惹くのは、語の新しい合成——これはやはり「混成語」でしかない——を一語にまとめるのを憚るかのよう、ここでも「認識・論」という慎重な書き方になっており、また形容詞も見当たらないことである。それではプラントルがこの語を新たに案出したのだろうか——私はそうではないかと思うのだが——、それとも彼はそれをラインホルトやアーベルトから受け継いだのだろうか。もしプラントルが後二者のことを知っていたなら、たぶんまったく躊躇いなく「認識論」と書いただろうし、それ

だけでなく、「認識論的」という形容詞——これは実に似つかわしい——をも使用したはずである。そして同じことはツェラーにもいえる。この語はツェラーの講義以降、頻出するようになった。ドロービッシュは一八六三年出版の『論理学』<sup>(4)</sup>の第三版において序文でこの語を用い、ツェラーと同様、それに続けて認識論についての講義を行うことを予告した。この語は他でも頻用されており、例えば一八六九年にシュナイデヴァインが『哲学月報』第二巻に「ソクラテス以前の思想家における認識論的・倫理学的哲学説の萌芽について」<sup>(4)</sup>という論文を書き、一八七〇年にカンペがアリストテレスの認識論について書き<sup>(4)</sup>、一八七〇年にブノワが「ロックの認識論の叙述」<sup>(4)</sup>を出すというように、七〇年代初頭までにこの語はかなり広範囲に浸透している。これ以降この語は、ヴァインデルバント、ヴァント、ツオルベ、ハルトマン、キルヒマン、ユルバーヴェーク、コーエン、エルトマン、ロツツェ、ランゲ等のところに幾度となく見いだされる。とかくするうちに言わず語らず、論理学、認識論および形而上学を理論哲学の三つの学と見なし、これらを厳密に区別し、そしてこの順序で築き上げてゆく方へと意見はまとまっていた。ヴァントは自身のライプツィヒ大学就任演説においてわれわれの知のこの秩序を初めて厳密な仕方で提示した。ラースは一八七四年に『哲学月報』第十巻<sup>(4)</sup>（二三三頁で）、ひとびとの意見がいよいよ「認識論」という表現へとまとまってくるように見える旨を述べた上で、同所で認識論の課題をすっきりと描き出し、また同時に彼はそれを形而上学の課題と

すっぱり切り離す。この名称がいまや支配権を握っていることは明らかで、他の諸々の試みが世の共感を得ることはなかった。ハーゲン・バツハとフリードリッヒは「思念論 Noetik」を流行らせようとしたが無駄だった。ハルトマンは「悟性論 *Dianoilogie*」というショーペンハウアーの表現を幾度となく使ってきたが、後に続く者はない。「弁証論 *Dialektik*」という表現も、シュライアーマツハール以来再び認識論を指すものとして台頭し、デューリングもこれを仲間入りさせようとしたが——プラトンの意味でのダイアレクティークならわれわれのいう認識論に含まれるとはいえ——上手くないかというのである。「批判 *Kritik*」「批判的 *kritisch*」という語も確かに多用されるが、「批判」が単に哲学だけでなくあらゆる学の主要問題であることから簡にして要を得たものとはいえそうにない。「理性批判」という結合語もやはり似つかわしくなく、これではあさわしい形容詞が手に入らない。デューリングは自身の『批判的哲学史』(48)(三二二頁)において「概念批判 *Begriffskritik*」という特徴的な語を導入しようとし、その直後にも「概念批判的 *begriffskritisch*」考究というようにその形容詞形を用いており、ふさわしい形容詞が必要とされることが新たな名称の造り出される主な動因であることを証している。しかしながらこの提案は、ランゲもまた「諸概念の批判 *Kritik der Begriffe*」を「認識論」と同義的に用いているとはいえず、まず顧みられることはないだろう。既に述べた、「認識論的」という形容詞がもつとも似つかわしいという事情と、さらに「認識論者 *Erkenntnistheoretiker*」

という語がやはり非常に手ごろであるということが、右のような他の試みすべてを抑え込むのに役立っており、それは他の理由、例えば「知識学」や「弁証法」という語によって「認識論」に「反対する理由を上回る。なるほど前者の「知識学」を幾人かのヘーゲル派の人々は導入しようとしているが、とはいえ彼らの権威も、上述の単純ながらきわめて重要な実用上の理由の前に引き下がらざるをえないだろう。とかくするうちに言わず語らずひとつの普遍妥当的な用語法への道が拓け、不必要な実用性を欠く造語は廃されて実用的であると同時にそれに対する歴史的な正当性をもった造語が導入される。そしてこのうち正当とされるのは他でもない「認識論」という語であり、なるほどこの語は言語学的観点から頼りに、当地(「ライプツィヒ」の仲間内でも攻撃されているが、しかし、これは例えば「社会学 *Soziologie*」のようなその野蛮な組成にもかかわらず普及した語ほどひどいものではない。論理学、認識論そして形而上学は厳密に区別されてきたし、いつかついに、必ずしもあらゆる哲学者が学識ある義勇兵として自身の一存で新たな術語を導入する権限をもつわけではないという洞察が得られたときには、なおいっそう分け隔てられるだろう。次のことは少なくとも歴史の発展の結果として明らかである、すなわち、そうした三区分が必要かつ有用であること、そしてそれに従うのは誰にとつてもよい結果になるだろうということ。望むらくは、かの三区分とかの術語とがおいおい共有財産となるように、また、認識論が論理学なり形而上学なりに帰せられ、そのために混濁や



混乱の生じることがないように。しかし認識論の方でも論理学や形而上学に絡み入ってしまったようにやはり留意し、あちこちに出現しているこれら「三つ」の領域を混合しようという試みがエネルギッシュに抑え込まれるように。数々の闘争を費えとしてドイツが獲得したのがこの区別なのであって、他の哲学的な国家のいずれにもこうした特色はこれまでなかったが、やがて「認識論」も翻訳されるだろうし、どのみちその「三分」という特色も普及してゆくだろう。最も明晰な仕方では、この三つの領域の区別はヴントが先に挙げた「ライプツィヒ大学就任の際の」小講演（経験科学に対する哲学の影響について）<sup>(49)</sup>において述べているのが認められる。

探索の手をよりいつそう広げ、歴史の進展の中で「認識論」のために用いられてきたさまざまな表現を跡づけるのは難しいことではないだろう。私はこれについてはとくにユーバー・ヴェークの『論理学』<sup>(50)</sup>を挙げておく。たしかに彼は認識論と論理学とを混同する誤りを犯しはしたが、「歴史的な見通し」をもって材料を将来の認識論の歴史のために積み上げている。それにしても注目されるのは、ユーバー・ヴェークが一八五七年に著したその『論理学』の第一版序文で既に「認識論的」という表現を用いていることである。私の見るところ、ユーバー・ヴェークは（もし彼が、まずありそうにないことだが、私の手許にある一八六八年付の第三版の中の第一版序文の複写においてこの表現を後になつてはじめて挿み込んだのだとすれば）これを「エルンスト・ラインホルト

から受け継いでいる。これに対して私は、プラントルはこの表現を新たに造り出したか、あるいは——かすかな記憶もとに生じてきたにせよ——新たに造り出されたものと見なし、と想定してさしつかえないと思っている。トレンデルンブルクの『論理学研究』<sup>(51)</sup>第二版には「認識論」という表現も「認識論的」という形容詞も見られなかった。フィッシャーの『近世哲学史』<sup>(52)</sup>の諸版にまで調査を広げることには容易にできようが、そこでは私の知る限りこの表現は一度も使われておらず（——実際には一八六〇年の『近世哲学史』初版第三巻の一八、一九頁に「認識論」の語が見られる——）、同じことはエルトマン等にもいえるが、しかしながら、私にはこうした探索によつて結果が異なるとは思われない。この調査に際して留意しておくべきは、そうした表現がまったく無自覚に習得され使用されるものだということである。

私の探索の結果は——おそらくより適した立場からなお補完されうるもので、私はこれを決着済みと称するつもりは毛頭ないが——、それゆえ以下の通りである。すなわち、カントの諸研究によつて既に前世紀（一八世紀）末には新たな術語の必要が生じ、当時、ある共有される表現に市民権を与えるべくさまざまな試みがなされた。「認識説」という表現は一八〇八年に現れたが、この名称の創始者であるクルークが認識説を形而上学と混同し同一視したことは別としても、一般的な規定とはならなかった。「認識論」という語の精神上的創始者は父親の方のラインホルトであるが、とはいえず息子の方のラインホルトが一八三二年にこの語を実際に造

り出して使用し、直ちにその形容詞を用いた。この語とはいえ、認識論的研究そのものが背景に退いていたという単純な理由によって、一般に受け入れられるには至らなかった。それゆえ事柄を弁えぬ人々、例えばヘーゲルと彼の学派などはこの語をやはり用いてこなかったが、しかしヘルバルトによって「認識説」は心理学に引き入れられた。プラントルおよびユーバー・ヴェークがそれを再び（前者が「認識論」を一八五五年に、後者が「認識論的」を一八五七年に）用いたことで、いよいよこの語は表立って世に広まっていたものと見える。

しかしながら、なにより新たに興ったカント研究が、その学にあざわしい名称もつ必要があることを改めて自覚し、ツェラーの貢献によってこの表現は一八六二年、小ラインホルトのもとに登場してから三〇年の後に、ついに人口に膾炙するまでになった。カント研究の高揚とともにこの新しい表現も広がりを見せている。——もつとも実際には二度目の創出、または想起ではあるのだが。そうした語にとつては表題に用いられることが決定的な意味をもつものである。E・ラインホルトは表題に用いなかったので、この語は普及しなかった。まずツェラーが講演においてこれを表題に活用し、そこで彼はすばらしく明晰にこの新たに命名された学に課題とプログラムも設定して見せたのだが、それ以来この表現は広まって、いまやこれは支配的になっているし、今後もそれはそうだろう。

### 「認識論」という語の歴史のために

Dr. ハンス・ファイヒンガーが本誌（『哲学月報』）の今年度の第二分冊で取り扱われた興味深くもない問いに刺激されて、目下私の自由に扱えるそのための資料の範囲内で補足的探索を行った。私が見いだしたことは、実は文献的にはエルンスト・ラインホルトの一八三二年以下刊の『人間の認識能力の理論』より前に遡るものではないが、かの『認識論』という語が二方面から同時に生じてきたことを確からしくするものである。私は現在（I）・H・ファイヒター一八二九年から——そして三〇年代にもつとも豊富に——Ch・H・ヴァイセに宛ててしたためた書簡を保管しているので、『認識論』の語がこの文通の中で、とりたてて第三者からの影響をさしはさむことなく、いわば有機的かつ恒常的に生じてきているのを確かめることができる。ここで私が目にするのは、ファイヒターが既に一八三〇年の五月以来、ヘーゲルの汎論理主義に対する闘争の中で自身の知友をなお次の点、すなわち——ヴァイセが当時やはりそうしようとしていたように——客観的、形而上学的な論理学から哲学の体系を始めるのではなく、むしろある「先予学 *Vorwissenschaft*」、「学についての学」を、そもそもまず人間精神にとつての客観的認識の可能性に決着をつけることを課題として先立たせるべきであるという点でまた、ヘーゲルから脱却させようと努力していることである。一八三一年の九月一三日からファイヒター自身の体系のこの第一部門——というのは、そのようにファイ

ヒテはこの「先予学」を見られたがっているからだ——に  
 対して「認識作用の理論 Theorie des Erkennens」とか「認識  
 の理論 Theorie der Erkenntnis」という名称を用いている。と  
 ころでこのファイヒテの書簡に答えてヴァイセは、おそらくさ  
 しあたりただ簡便のために、「認識論 Erkenntnistheorie」と  
 という短縮形を用いており、これは私の資料では——ヴァイセ  
 がファイヒテに宛てた書簡を私は所持していない——まず第一  
 にファイヒテが一八三二年四月二十六日付の書簡に編み入れた  
 ヴァイセの返信の引用に認められる。ファイヒテは「認識作用  
 の理論」ないし「認識の理論」という形にとどまっている。  
 これに対してヴァイセはこの時以来「認識論」という語も出  
 出版物の中で使用し、まず一八三二年から翌年にかけて出た  
 ファイヒテの著作——これは件の「認識作用の理論」を叙述し  
 たものである——の書評のなかで、すなわち一八三四年の『ハ  
 イデルベルク年報』上で用いている。爾後この語はヴァイセ  
 の論文に頻出し、一八三七年にファイヒテの雑誌（『『哲学・  
 思弁神学雑誌』』に所載のものなどがそれにあたる。  
 一八五三／五四年の「論理学」の講義冊子では「認識論」は  
 論理学の別名であるとヴァイセは述べており、この語はわれ  
 われ門弟の仲間内でそのまま通用する表現であった。——こ  
 のことはショーペンハウアーについての私の著作（一八五七  
 年）<sup>(53)</sup>もついでながらその証拠となる。

ルドルフ・ザイデル

Dr. ハルムス氏がわれわれに注意して下さったことによ  
 ると、「認識論」という語については既に氏の「一八四五年刊  
 の著作『人間学主義』<sup>(54)</sup>等において、単に間に合わせに用い  
 られているのではなく、カント以降の諸体系を把握・評価する  
 際に首尾一貫した仕方で使用されている。この表現がブラン  
 トルとユーバーヴェークによってはじめて再使用されるに  
 至ったというファイヒンガー氏の仮説は、それゆえ支持され  
 ない。

ハルムス『ファイヒテの哲学』、キール、一八六二年、一五  
 頁（体系的哲学のための論考、二八五頁）<sup>(55)</sup>も参照のこと。

編集者（F・アシャーゾン、J・ベルクマン、  
 E・ブラウトウシエック）

## 解題

ここに訳出したのはハンス・ファイヒンガー (Hans Vaihinger 一八五二・一九三三) による一八七六年の『哲学月報 *Philosophische Monatshefte*』第一二号 (第二分冊、八四・九〇頁) 所載の論文 *Über den Ursprung des Wortes „Erkenntnistheorie“* およびこれに呼応して同誌上 (第四分冊、一八八・一八九頁) に現われたルドルフ・ザイデル (Rudolf Seydel、一八三五・一八九二) 等による議論 *„Zur Geschichte des Wortes „Erkenntnistheorie“* である。

「認識論がそもそも科学的デイシプリンであるとすれば、それは哲学の諸々のデイシプリンのうちで最も若々しくまた最も重要なものである」。——二〇世紀も四分の一を過ぎようという時点でフリッツ・マウトナーはそのようにいっているが (Fritz Maunher, 1923. Art. *Erkenntnistheorie*, in *Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 1, Leipzig, S. 445) 避ることおよそ半世紀、認識論的な研究動向が高まりをみせるなかにあって当時二四歳のファイヒンガーは、当の語が E・ラインホルトの一八三二年の著作に由来し、また、中断を挟んで一八五五年のプラントルおよび一八五七年のユーバーヴェークの用例がその動向の本格化の契機であるという調査研究を『哲学月報』誌に発表した。

こうした調査の常として、語の初出についてはその後さらに遡った用例が見いだされている。あわせて訳出した同誌上でのザイデルとハルムスの報告と、とりわけ以上を踏まえた

——はるかに下って一九八一年の——K・Ch・ケーンケの再調査によって、言葉に関しては一八一九年のテンネマン (Wilhelm Gottlieb Tennemann) の『哲学史 *Geschichte der Philosophie*』第一巻 (その中のロックについての叙述箇所) にまで遡りうること、またファイヒンガーによって認識論の概念の実質的な創出者とされた E・ラインホルトについても既に一八二七年には「認識論」の語を用いており、二九年の時点で実質の規定にも達していることが確認されている (Klaus Christian Köhnke, 1981. *Über den Ursprung des Wortes Erkenntnistheorie - und dessen vermeintliche Synonyme*, in *Archiv für Begriffsgeschichte*, 25, 185-210)。

ファイヒンガーの論文はそれゆえ、内容的には乗り越えられた先駆的業績であり、さしあたっては歴史的ドキュメントということになるだろう。翻ってしかし、既製品として移入されたためか、わが国ではこのデイシプリンの形成・展開に関する事実認識は必ずしも十分に共有されておらず、また近年では、ときにナイーヴに形而上学への傾きを示す英米圏の *Theory of Knowledge* ——おそらく *Erkenntnistheorie* の翻訳語と見られる——の文脈で、認識論史に関してプラトンから一九世紀末までを「古典的」の一語で片付けてしまうような傾向も見受けられる。その形成・定着のただなかで認識論が論理学および形而上学とのきびしい緊張関係に置かれていた事情を伝える本論文は、右のような状況に照らしてみるならば、改めて「治療」という積極的な意味をもつに至っているようにも思われる。

ちなみに著者ファイヒンガーにとって本論文は、同じ一八七六年の『ハルトマン、デューリング、ランゲ——一九世紀哲学史のために／批判的試論 Harmann, Dühring und Lange. *Zur Geschichte der Philosophie im 19. Jahrhundert. Ein kritischer Essay*』とともに、その長年にわたる研究生生活の最初の仕事にあたる。後年の『純粹理性批判』の註釈や『かのようにの哲学』によって知られる一九世紀の最良の哲学研究者（のひとり）の原点として、あわせて味読いただければ幸いである。

## 文献

\*本文中で言及されている主要な論著の書誌情報（著者名・出版年・書名・出版地）は以下のとおり。ファイヒンガーのテキストには誤脱が散見されるが、翻訳にあたって本文では著者の記述のとおりに訳し、正しい情報は本文中に〔 〕で註記するところとした。

- (1) Locke, John, 1690. *An Essay concerning Humane Understanding*, London.
- (2) Schäfer, Emanuel, 1860. *John Locke. Seine Verstandestheorie und seine Lehren über Religion, Staat und Erziehung*, Leipzig.
- (3) Leibniz, Gottfried Wilhelm, 1765. "Nouveaux essais sur l'entendement humain," in Rudolf Eirich Raspe (ed.), *Oeuvres philosophiques latines et françoises de feu M. de Leibniz*, Amsterdam/Leipzig, pp. 1-496.
- (4) Berkeley, George, 1710. *A Treatise concerning the Principles*

*of Human Knowledge*, Dublin.

- (5) Rüdiger, Andreas, 1704. *Disputatio de eo, quod omnes ideae oriuntur a sensione*, Leipzig.
- (9) Crusius, Christian August, 1747. *Weg zur Gewißenheit und Zuverlässigkeit der menschlichen Erkenntnis*, Leipzig.
- (7) Meier, Georg Friedrich, 1752. *Vernunftlehre*, Halle.
- (8) —, 1752. *Auszug aus Vernunftlehre*, Halle.
- (9) Reimarus, Samuel, 1756. *Vernunftlehre*, Hamburg/Kiel.
- (10) Eberhard, Johann August, 1776. *Allgemeine Theorie des Denkens und Empfindens. Eine Abhandlung, welche den von der Königl. Akademie der Wissenschaften in Berlin auf das Jahr 1776, ausgesetzten Preis erhalten hat*, Berlin.
- (11) Berkeley, George, 1709. *An Essay towards a New Theory of Vision*, Dublin.
- (12) Priestley, Joseph (ed.), 1775. *Hartley's Theory of the Human Mind, on the Principle of the Association of Ideas : with Essays relating to the Subject of It*, London.
- (13) Tiedemann, Dietrich, 1794. *Theäretik oder, Über das menschliche Wissen, ein Beitrag zur Vernunftkritik*, Frankfurt a. M.
- (14) Reinhold, Karl Leonhard, 1789. *Versuch einer neuen Theorie des Vorstellungsvermögens*, Prag/Jena.
- (15) Maclaurin, Colin, 1742. *A Treatise of Fluxions*, Edinburgh.
- (16) Newton, Isaac, 1687. *Philosophiae naturalis principia mathematica*, London.
- (17) Fichte, Johann Gottlieb, 1794. *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, Leipzig.

- (21) Bouterwek, Friedrich, 1799. *Idee einer Apodiktik. Ein Beytrag zur menschlichen Selbstverständigung und zur Entscheidung des Streits über Metaphysik, kritische Philosophie und Skepticismus*, Halle.
- (22) Fries, Jakob Friedrich, 1807. *Neue Kritik der Vernunft*, Heidelberg.
- (23) Maimon, Salomon, 1794. *Versuch einer neuen Logik oder Theorie des Denkens: Nebst angehängten Briefen des Philaretos an Aenesidemus*, Berlin.
- (24) Abicht, Johann Heinrich, 1791. *Philosophie der Erkenntnisse*, Bayreuth, 1791.
- (25) Schopenhauer, Arthur, 1818 [1819]. *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Leipzig.
- (26) Krug, Wilhelm Traugott, 1808. *System der theoretischen Philosophie. 2. Theil: Erkenntnislehre oder Metaphysik*, Königsberg.
- (27) ———, 1820-21. *Handbuch der Philosophie und philosophischen Literatur*, Leipzig.
- (28) ———, 1806-10. *System der theoretischen Philosophie. 3 Bände*, Königsberg.
- (29) ———, 1827-28. *Allgemeines Handwörterbuch der philosophischen Wissenschaften*, Leipzig.
- (30) Beneke, Friedrich Eduard, 1820. *Erkenntnislehre nach dem Bewußtsein der reinen Vernunft*, Jena.
- (31) Berger, Johann Erich von, 1824. *Allgemeine Grundzüge zur Wissenschaft. III: Anthropologie und Psychologie*, Altona.
- (32) Reinhold, Ernst, 1822. *Grundzüge eines Systems der Erkenntnislehre und Denklehre*, Schleswig.
- (33) Sengler, Jakob, 1858. *Erkenntnislehre*, Heidelberg.
- (34) Schmid (aus Schwarzenberg), Franz Xavier, 1863. *Entwurf eines Systems der Philosophie auf pneumatologischer Grundlage. Erster Theil: Grundlinien der Erkenntnislehre*, Wien.
- (35) Oehlmann, W., 1868. *Die Erkenntnislehre als Naturwissenschaft, eine Einleitung in die Philosophie auf der Basis der naturwissenschaftlichen Psychologie*, Cethen.
- (36) Studt, H. H., 1869. *Die materialistische Erkenntnislehre*, Altona.
- (37) Montgomery, Edmund, 1871. *Die Kant'sche Erkenntnislehre widerlegt vom Standpunkt der Empirie*, München.
- (38) Reinhold, Karl Leonhard, 1812. *Grundlegung der Symonymik für den allgemeinen Sprachgebrauch in den philosophischen Wissenschaften*, Kiel.
- (39) Reinhold, Ernst, 1825. *Karl Leonhard Reinhold's Leben und literarisches Wirken, nebst einer Auswahl von Briefen Kant's, Jacobi's und anderer philosophirender Zeitgenossen an ihn*, Jena.
- (40) ———, 1832-34. *Theorie des menschlichen Erkenntnisvermögens und Metaphysik*, Gotha/Erhart.
- (41) Apelt, Ernst Friedrich, 1840. *Ernst Reinhold und die Kantische Philosophie. Erstes Heft: Kritik der Erkenntnistheorie nebst einer Zuschrift an ihren Verfasser*, Leipzig.
- (42) Rosenkranz, Karl, 1840. *Geschichte der Kant'schen Philosophie*, in Karl Rosenkranz und Friedrich Wilhelm Schubert (Hrsg.), *Immanuel Kant's Sämmtliche Werke, zwölfter Theil*, Leipzig.
- (43) Zeller, Eduard, 1862. *Ueber Bedeutung und Aufgabe der*

*Erkenntnis-Theorie, Ein akademischer Vortrag*, Heidelberg.

- (41) ———, 1844ff. *Die Philosophie der Griechen. Eine Untersuchung über Charakter, Gang und Hauptmomente ihrer Entwicklung*, Tübingen.

- (42) Prantl, Carl, 1855. *Geschichte der Logik im Abendlande, erster Band*, Leipzig.

- (43) Drobesch, Moltiz Wilhelm, <sup>1</sup>1863. *Neue Darstellung der Logik nach ihren einfachsten Verhältnisse mit Rücksicht auf Mathematik und Naturwissenschaft*, dritte neu bearbeitete Auflage, Leipzig.

- (44) Schneidewin, Max, 1869. "Ueber die Keime erkenntnistheoretischer und ethischer Philosopheme bei den vorsokratischen Denkern," in *Philosophische Monatshefte*, 2 (4), 257-270.

- (45) Kamppe, Friedrich Ferdinand, 1870. *Die Erkenntnistheorie des Aristoteles*, Leipzig.

- (46) Benoit, Georg von, 1870. *Darstellung der Locke'schen Erkenntnistheorie*, Bern.

- (47) Laas, Ernst, 1874. "Ueber die Unsterblichkeit der Seele," in *Philosophische Monatshefte*, 10 (3), 111-134.

- (48) Dühring, Karl Eugen, 1869. *Kritische Geschichte der Philosophie von ihren Anfängen bis zur Gegenwart*, Leipzig.

- (49) Wundt, Wilhelm, 1876. *Über den Einfluss der Philosophie auf die Erfahrungswissenschaften. Akademische Antrittsrede gehalten zu Leipzig am 20. November 1875*, Leipzig.

- (50) Ueberweg, Friedrich, 1857. *System der Logik und Geschichte der logischen Lehren*, Bonn. <sup>3</sup>1868. Dritte, vermehrte und verbesserte Auflage, Bonn.

- (15) Trendelenburg, Adolf, <sup>1</sup>1862. *Logische Untersuchungen, Zweite ergänzte Auflage*, Leipzig.

- (23) Fischer, Kuno, 1854ff. *Geschichte der neueren Philosophie*, Mannheim, u. s. w.

- (33) Seydel, Rudolf, 1857. *Schopenhauers philosophisches System*, Leipzig.

- (35) Harms, Friedrich, 1845. *Der Anthropologismus in der Entwicklung der Philosophie seit Kant und Ludwig Feuerbachs Anthroposophie*, Leipzig.

- (55) ———, 1862. *Die Philosophie Fichtes nach ihrer geschichtlichen Stellung und nach ihrer Bedeutung*, Kiel.